

# 熊本地震から2年 3回忌法要を営む

熊本教区



## 「時間だけが早く過ぎる」

「平成28年熊本地震」から2年となった。九州広域に甚大な被害をもたらした、熊本教区（農利信教務所長）では241カ寺が被災し門信徒33人が亡くなった。同教区は4月6日、熊本地震物故者3回忌追悼法要を熊本市中央区の熊本別院で営んだ。遺族、教区内の僧侶、門信徒、全日本仏教会の久喜和裕事務総長、東北教区相馬組の住職ら250人が参拝し、犠牲者を偲び、悲しみを分かち合った。

法要では、導師の農利信教務所長が「ここに深く追悼の思いを表すと共に、地震発生から今日に至るまで悲しみ苦しみを分かち合い、支援をしてきたことにすべての皆さまへ心より感謝の意を表します。そして現在も困難な毎日を送っておられる方々の声をわがこととして聞き、手を携えながらお念仏のみ教えと共に被災地復興へ向けての歩みを進めていきたい」と声を詰まらせた。白布を讀み上げた。堂内からはすすり泣く声とお念仏がこぼれ、阿彌陀尊のおつとめの中、遺族が焼香した（写真）。

法要中、ハンカチで目頭を押さえていた女性がいた。息子の大和晃さん（当時28歳）を亡くした母・忍さんである。阿蘇市で暮らしていた晃さんは平成28年4月14日に起きた前震の後、熊本市内

馬組から湯澤義秀組長と同組の住職4人が法要に参拝した。湯澤組長は「2年前に熊本地震で被災された方も東北の私たちを思い、続けて物資を届けてくださり頭が下がる。そのお礼を込めて参拝させていただいた」と話していた。8日の益北組熊本地震復興の集いの参加者にも配られた。

■北海道の香り  
追悼法要の参拝者には記念品として北海道教区上川南組打本厚史組長が届けた匂い袋が配られた。同組は門徒が育てたランタンをホブリ（香）に、仏具員らが作った袋に詰めて500個を届けた。



### 「それでも前を向いて」

熊本県大津町・光尊寺門徒の郷テルミさん（82）と孫の高田尚子さん（32）が、昨年の1周忌に続いて熊本別院の法要に齊藤真住職と共に参拝した（写真）。

尚子さんは、南阿蘇村立野地区で一緒に暮らしていた母・高田一美さん（当時62歳）を亡くした。「こたつを挟んで母と一緒に寝ていた。4月16日の本震で天井が崩れ落ち、母は下敷きとなり、その後ははっきりと覚えていない。あれから早2年。母を亡くした悲しみはいつまでも変わらないが、それでも前を向いていかねばと思う。私が弱気になると祖母も心配するだろうし」と語る。

テルミさんは「私の家も被害を受けたので、今は孫とは別々の仮設住宅で暮らしている。なるべく孫たちに世話にならないように、元気でいなければという気持ちで生かさせてもらっている」と語っていた。